

「郷土米沢と紙芝居」 展示資料解説

※実際の展示順とは必ずしも一致しません

※一部、実際には展示されていない資料があります

りょうちゃん 1058 話

市内で街頭紙芝居の説明者（読み手）をしていた会田良雄氏より寄贈を受けた作品の一つ。本作は一話完結型のギャグストーリーものと思われる。本資料が 1058 話目とされるため、超人気作として長期にわたり大量のエピソードが制作されたものと考えられる。ゲン吉が自分へのイタズラを用意したことを察知したペチョコは、ゲン吉の父親をイタズラの犠牲者にすることでゲン吉を懲らしめた。

制作元の「あけぼの会」は昭和 21 年（1946）、東京で創立された紙芝居の制作・貸元の会社。本作の作者等は不明。絵柄はコミカルかつ躍動的。絵の面の仕上げにニスを塗った際の刷毛の毛が付着し残っている点は、手書きの紙芝居の味わいを感じさせる。

骸骨島 No.1

冒険ものと思しき連載作の第一話。制作元の聖和社は東京にあったとされる紙芝居間屋。本作の作者は不明。一枚目に「少年補導視聴覚強化運動本部」の印が捺されている。この運動本部の詳細は定かではないが、紙芝居の教育的影響に対する批判を受けて昭和 20 年代後半に設けられた自主規制のための組織であると推測される。

兄妹が鬼界ヶ島の海で釣りあげた巨大サメの腹から海賊キッドの宝の地図が出て来た所で第一話は終わる。絵は写実的で、人物の彩色はグラデーションが施され立体的に表現されている。また、彩色は画用紙の下に貼られた台紙のふちにまで及んでいて、作者の矜持が感じられる。

怪盗ルパン No.1

フランスの小説家モーリス・ルブランが発表した「アルセーヌ・ルパンシリーズ」から着想を得た作品の第一話。制作元は前出のあけぼの会。字の面には同会の住所が入ったゴム印が捺されている。作画は小島ひろし、色着は丘洋児とあるが、両者については定かではない。写実的な絵柄で、人物ごとの心情をリアルに表現している。

本資料の最後には茨城県真壁郡居住の人物の名と電話番号が記されているが、これは相田氏より以前の所有者かと考えられる。東京で作られた紙芝居が各地で利用され、今に伝わってきたことが感じられる。

孫悟空 第 100 話

東京あけぼの会の制作。本作の作者として名が出ている八木為太郎はあけぼの会の設立者。作画は前出の怪盗ルパンと同じく、小島ひろし。昭和 26 年（1951）設立の「紙芝居倫理規定管理委員会」の印が捺されている。印に「E」とあることから昭和 30 年の作とわかる。

本資料では西遊記のうち、虎力・鹿力・羊力の三大仙と悟空たちとの戦いの一場面を描く。怪盗ルパン同様、絵柄は写實的。反面、字の面の文字は粗雑であるが、これは当時の手書き紙芝居に共通した特徴ともいえる。

黄金バットの二代目作者としても知られる評論家・加太こうじは自著『紙芝居昭和史』の中で、戦後に東京あけぼの会で作画を担当するようになった新人作家・小島剛夕について触れている。剛夕は後に漫画家に転身し、大ヒット作『子連れ狼』の作画担当などとして知られるが、同著では、剛夕の画力はめきめき上達し、紙芝居の衰退期まで作品を作り続けたと記す。これらの情報を基にすると、今回展示した「あけぼの会」制作の作品で、「小島ひろし」の名で作画を担当した人物は、小島剛夕その人であったのかもしれない。この点については確証が得られないため現時点では憶測の域を出ないが、優れた本作の作画からはその可能性を感じずにはいられない。

上杉鷹山（当館蔵 K779/サ）

昭和 17 年（1942）制作。発行者の今井よねは、印刷・頒布できる紙芝居を初めて制作した人物として知られる。発行所は今井が設立した紙芝居刊行会。

戦前の修身の教科書で取り扱われるほどに広く知られていた上杉鷹山の生涯と功績を題材として、教育目的に作成されたと思われる作品。文章に時々あらわれる「共存共栄」「挙国一致」などの文言は、太平洋戦争の只中にあった当時の世相を反映している。

前出の街頭紙芝居に比して、一枚ごとの文章量はおおよそ倍以上あり重厚。

幸寿丸（当館蔵 K779.8/タ）

昭和 19 年（1944）制作。忠孝の鑑として古くから謡曲や読み本に取り上げられてきた幸寿丸の物語を紙芝居化したもの。

そもそも幸寿丸は摂津の人であるが、その遺骨は信濃善光寺に納められた後、戦国時代に善光寺本尊が流転する間に謙信の手許に移り、上杉家の移封にともない米沢へ伝えられたとされる。昭和 16 年、法音寺において幸寿丸盂蘭盆法要が執り行われ、法音寺境内に幸寿丸の墓が新たに建立された。本作はその時分に企画されたもので、東部国民学校の教頭を務めていた高森務に制作が依頼された。米沢市長宇佐美辰五郎の名で発行され、各学

校や官庁へ配布されたという。発行所は大政翼賛会米沢支部。物資不足の世情を反映してか、紙の品質や寸法のバラつきが大きい。

よねざわ小学生新聞 第 129 号（当館蔵 K370/Yo）

昭和 49 年（1974）発行。市内小中学校の視聴覚コンクールに応募のあった作品のうち、特選に選ばれた北部小六年の上村秀昭君の紙芝居「進の進歩」を紹介する。

物語の主人公、小学六年生の進（すすむ）は、はじめは家業の納豆屋を良く思っていなかったが、父の事故をきっかけに考えを改め、家の手伝いや勉学に邁進して行く。この年の視聴覚コンクールには 150 点の紙芝居作品の応募があったと紙面には記されている。

あいさつの風がふく町（当館蔵 K779/ク）

平成 20 年（2008）作。作者は市内在住の黒田三佳氏・すみれ氏の親子。

東京から米沢へ移住した主人公のすみれの成長を中心に、笑顔であいさつを交わすことのすばらしさを伝える内容。米沢の人々が皆好人物に描かれている点が印象的。「手作り紙芝居コンクール」応募作品。

びっきのぼうさま（当館蔵 K779/こ）

平成 7 年（1995）作。作者は窪田町の小浦享子氏。前年に南陽市で開かれた「手作り民話紙芝居講座」の中で作られた作品。山形の民話を題材にした紙芝居集「とんとむかしがたり」全六巻のひとつとして、東京の童心社から発行された。

武田正が採録した民話「蛙の坊さま」が原作。にわか坊主になったカエルのもとに家族の供養を願い出る動物たち。はじめの頃は懇ろに経をあげていたカエルだが、直に飽きてしまい粗雑な対応をとるようになり。天罰があたったかのように投石にぶつかり池の底へ沈みゆく自分自身を弔いながら話は終わる。

草相撲力士 小松山林四郎（当館蔵 K779.8/コ）

令和 6 年（2024）作。犬川村（現川西町）で明治時代に活躍した草相撲の力士・小松山林四郎を主人公にした物語。作者は川西町の小林幸子氏。関係各所に取材を重ねこの物語を創った。作画は福島市のイラストレーター・田口明佳氏が務めた。

村一番の力自慢だった林四郎は県外へも修業に出るなど鍛錬を重ね、めきめき相撲の実力をつけた。八人の弟子をかかえる親方となるも、若くして急死してしまった。弟子たちは親方をしのんで明治 17 年（1884）、林四郎の生家に石碑を建立したという。

本作は「令和 6 年度置賜地区自作視聴覚教材コンクール」で学校教育部門の特選に選ばれた。

(写真) 鳥呑み翁 (当館蔵 K779/タ)

紙芝居「山形県のむかしばなし」シリーズのひとつ。制作は山形県生涯学習センター。

うっかり飛びこんできた鳥を飲み込んでしまった「じさま」。そのせいか「ちんちょりん」と鳴る屁が出るように。おもしろい屁をたれる者がいるとの噂を聞いた殿様に呼び寄せられたじさまは、殿様の前で屁をすると山の様な褒美をもらった。そのことを知った隣人の欲深い男がじさまの真似をして殿様の前で屁をするも、余りの臭さに怒った殿様に叩かれてしまう。

(写真) えすがたにようぼう (当館蔵 K779/サ)

紙芝居「山形県のむかしばなし」シリーズのひとつ。

美しすぎる娘を嫁にしたせいで、日中の農作業に気が入らない男。嫁は自分の顔を紙に描いて男に渡し、それを眺めながら仕事に励むよう促す。男が喜びながら仕事に取り掛かったのも束の間、大風にふかれて紙は飛んで行ってしまう。嫁の自画像を拾った殿様はその姿に惚れ込み、部下に搜索するよう命じ、ついに嫁を屋敷に連れさらってしまった。

(写真) おままくわねよめさま (当館蔵 K779/コ)

小浦享子氏・香住氏の作。山形県図書館協会主催の第1回「手作り紙芝居コンクール」入選作品。嫁にご飯を食べさせるのが惜しいと言って一人暮らしを続ける男の家に、「ご飯は食べない」という娘が嫁にしてほしいと訪ねて来た。かいがいしく働く娘であったが、その正体は山姥だった。山姥は男を山につれていこうとするも、男は山姥が嫌う菖蒲ともぐさの草むらに隠れて難を逃れた。

(写真) んまいものにはワケがある！ (当館蔵 K779.8/ヨ)

平成29年(2017)米沢市発行。芋煮の材料がどこからやって来るのかを描く、子どものための消費者教育教材。制作の「エシカル Yonezawa」は市内の有志10名によって発足した団体。本作は市内の学校やコミセンなどに寄贈された。

(文責：市立米沢図書館 宮澤崇士)

(主要参考文献)

吉葉愛「戦時下における紙芝居文化：大衆文化の受容と統制」『昭和のくらし研究(10)』2012年

加太こうじ『紙芝居昭和史』立風書房、1971年

『戦中戦後紙芝居集成』朝日新聞社、1995年

昭和館『昭和の紙芝居～戦中・戦後の娯楽と教育～』、2012年